

日臨技と ASCP によるシカゴ研修に参加で得たこと

◎國廣 まり¹⁾
福山市民病院¹⁾

日臨技は、アメリカ臨床病理学会 (ASCP: American Society for Clinical Pathology) と連携し、臨床検査技師の国際化を促進する取り組みの一環として、2015年から米国の医療施設における短期研修プログラムを提供している。これまでに6名が参加し、筆者は2019年にイリノイ州シカゴにあるLoyola University Medical Centerへの派遣を経験した。COVID-19によるパンデミックの影響で、2020年から当該プログラムは一時停止となっていたが、本年度より再開された。研修者が学びたい内容に応じて研修先の部門を指定することができ、それを基にスケジュールが組まれる。あるいは特定の部門を対象とせず、臨床検査室全体の研修を選択することも可能である。筆者は従来から海外の臨床検査に興味を抱き、海外と関わりを持ちながら働く臨床検査技師になりたいと考えていた。そこで、このプログラムを通じて、医療先進国であるアメリカにおける検査の運用や内容を直接体験し、知見を深めたいという思いから応募し、これまで従事してきた血液検査部門での研修を希望した。そして、5日間のシカゴ研修を経て、臨床検査分野における日米の違いを知る貴重な経験を得ることができた。

研修中、日米の違いについて初めて触れたのは、勤務体制と血液検査部門の位置づけに関するものであった。アメリカでは夜勤専門シフトが存在し、実際に研修を受けたのは血液検査部門の日勤専門シフトの技師からであった。我々が血液検査部門の業務として行っている骨髓検査は、アメリカでは独立した骨髓検査部門が存在し、その業務内容も医師の介入による日本と異なる点があった。また、アメリカでは資格の違いにより Technician, Medical Technologist, Specialistに分類することが知られているが、実際の現場では特にSpecialistの立場が業務上の違いをもたらしていることを体感した。大学卒業後から現在に至るまで、一貫して同一病院での勤務経験しかない筆者にとっては驚くことが多かった。同じ臨床検査技師としての職種でありながら、異なる国での経験を通じて、これまで当たり前だと考えていた働き方や考え方に新たな視点や多様性を持つことができた。特に日本とアメリカの仕事内容に対する分担や責任について考察することができた点が大きい。

シカゴ研修を経験して、筆者の中で大きな2つの変化があった。1つ目は、米国の臨床検査技師資格取得に対する意欲が一層強まったことである。ASCPⁱ (ASCP International) は米国外居住者に対して認証されている臨床検査技師の国際資格であり、各分野に特化した専門資格も存在する。帰国後、筆者は血液検査分野のASCPⁱ取得を目指し、2021年にInternational Technologist in Hematology, H (ASCPⁱ) の資格を取得した。この資格取得を通じて、英語で血液学の専門知識を学ぶだけでなく、日本では得られなかった新しい知識も習得することができた。また、将来的にアメリカで臨床検査技師として働くという可能性も拓くことができた。2つ目は、医学検査学会の会場ブースにおいてASCPⁱの啓発活動に携わるようになったことである。本研修を経験したことがゴールではなく、その経験をもとに日本の臨床検査において我々が得た知見を共有し、新しい視点を提供できるよう活動している。筆者が経験したのは血液検査分野に限られるが、これまでの派遣者は異なる専門分野や検査室全般の研修を受けており、各派遣者からも情報を共有できる環境が整っている。2023年に群馬県で行われた医学検査学会では、日臨技のご支援と井田伸一前学会長のご協力のもと、派遣者全員による啓発活動を行うことができた。その中で、国際資格やシカゴ留学に興味を持つ臨床検査技師が予想以上に多いことを実感した。

本シンポジウムでは、シカゴ研修で得た経験と知見に焦点を当て、現在取り組んでいる活動や今後の展望について述べたい。

連絡先：084-941-5151（内線 1262）